

医芸歌壇



八月

東京 小松 安彦

立秋の夕べに開けり公園の今年最初のつくつく法師

熱帯のハイビスカスの咲きてゐる路地歩みをり暑き日の宵

桃色の蓮の荅と十四日月を眺める処暑の夕暮れ

盆踊りの歌声を聞きこほろぎの声を聴きつつ仰ぐ満月

木星と下弦の月を見てをれば東の空に昇るオリオン

東京 田村 豊幸

痴呆の林

痴呆症オーイオーいとあつい日に誰を呼んでる午前も午後も

蟬の穴痴呆出て来て入る穴そんなことなどフト思う夏

リハビリの名目入院したけれど右も左も口あけ痴呆

意識あるないの不明の長命者手足引っぱるこれリハビリと言っ
リハビリの前の処方箋をフト見ればめまい・ふらつき・多副作用かな

東京 初芝 澄雄

五浦浜

荒磯に碎け散る波望みつつ船いだしけん天心思う

岩を嘔み白波砕く五浦浜御堂の下に激浪寄する

秋雨に濡れし岩肌黒々と五浦浜に激波で寄する

天心の昔の夢を残したる六角堂に寄せる荒波

松風や五浦浜を吹き渡り天心の夢語りて過ぎぬ

暑き夏

青森 秋霧 朝光

暮れゆけば淋しさつのる夜(こ)に明日に希望をだいて眠らん

郭公の声に目覚めて暁の空におぼろな半月仰ぐ

暑き夏思いおこすは幼らと汗を拭きつつ芋を掘りし日

整然とひばの厚木積まれゐて木場にその香の満つる親しさ

はらからの縁も淡句なりゆくか甥の婚儀を人づてに聞く

安房鴨川

千葉 蒲谷 玲子

胸ゆるする波音絶えず波頭の白きレエスは翻りゆく

三度揚情し昏せざるの堅き目玉を残し

沖のかた釣り舟一つ一文字日の出に向かい航線を引く

日の出浴び漁に出づるは生業かそんなたつきを少し羨む

浜に立ち日の出見つめし人々の心にも陽の昇りたるらん

定年哀歌余情

東京 林 宏 匡

勇退せむ老校医とし振り返る三十六年なほ未練あり
身障の学童のいのちあづかりて長くもあらぬ三十六年

P.T.A会長とても若き母手渡し呉るる感謝のブーケ

産業医に校医かけもち嘱託を務め終へしも老諾へず

校医退きてもの足らなくもゆとり持ちて地域医療に捧げむかひじょう一生

盛夏

茨城 羽生 藤 伍

同窓会ノンアルコールと並の酒五角にならび賑わいにけり

夕暮の散歩に出るも風微温ぬるく犬の足許嘸熱さそからん

真夏日や街の樹の枝少し揺れ湖畔は涼しき南風はえやまず吹く

わが町は白鷺の郷初秋の稲刈りし田に集まりて来る

青鷺は丈高たけくして広き田に哲人のごと孤立して立つ

鳩杖

東京 横田 英 夫

杵寿越え生老病死は傍らにひたと寄り添う影のごとくに
杵の字は験しるしが悪しと思ひ居り卒倒卒中卒去等々

杵の字を忌みしと知りて息子等は鳩杖と変えて杖贈り呉るる

贈られし杖の握りのつやつやと赤檜色に光るを見つむ

杖無しで歩けぬ程にも非ざれば握りて歩む警棒のごと

フィンランド寸描

神奈川 武井 忠 夫

酷暑続く夏の最中に北欧の清さやけさ求め巡り辿れる

(ハメーンリンナ近郊)

見はるかす森の緑と静もりて湖澄めるアウランコ公園

満天を茜に染めて燃えるがに海面うなもかがよ耀うボスニアの海

(チーンタリ／スペ・ホテル)

糸車や刺繍女性の民族衣装とぎに時代立ち返り泰西画めく

(チーンタリ／博物館近郊)

空青く白亜も淨き大聖堂に緑のドーム並び立ちたる

前号で「短歌会」開催の打診をいたしました。

積極的な参加者募集ではなかったの

で、応答がありませんでした。時期は正月

を過ぎ、暖かくなつてからと考えますが、

いかがなものでしょうか。

冬季号に寄稿される際、▽出席あるいは

欠席▽作品だけ参加——のように、▽ご連絡

ください。

(編集部・α)